

— 一年のはじまりにあたり —

今年も、除夜の鐘の音とともに新年を迎えました。本年もよろしくお願いいたしますします。

この時期になりますと、あちらこちらで椿の花が咲き誇っています。いつの季節であっても自然の周期の確かさを感じます。

昨年のテレホン法話でも例に挙げ繰り返すにはなりますが、ある染織家の方が興味深い話をしておられます。それは「花そのものでは、色は染まらない。桜の花弁ばかりを集めて染めると、灰色がかった薄緑色になってしまう。花が咲く直前の幹を煮出して染めると、匂いたつような桜色になる。九月に染めても同じ色は得られない。このことは自然の周期を予め伝える暗示にとんでいる」と語られています。

目には映らない処で木々は樹液を巡らし、花のいのちを膨らませているのでしょう。今日とひと繋がりの方が来ると実感いたします。

このように植物が、その時期になれば必ず花を咲かせるように、自然は普遍的で、変わることなく、私たちの思いとは関わりなく時間は経過していきます。

自然（しぜん）は、仏教、真宗では、（じねん）と読みます。「自然のことであり」という表現がありますが、それは必然的に、とか、自ずから、といった意味です。

そういった中で、その時間の流れの中で、人生を送っていく中で、私たちは、いろんな出来事に遭遇します。それは、布の生地に喩えますと、生地の縦糸のごとくにある、時間の経過とともに様々な事柄が起こってきます。

では、横糸は何か……。それは私たち人間です。

しかし、生地の縦糸のごとくにある、時の流れのみが語られているようです

— 一年のはじまりにあたり —

が、そこに、生地（生地）の横糸のごとくにある、私たち人間というものが語られなければならないのではなでしょうか。

私たちは、生きていく中で、いろんな事柄、出来事に出くわします。その出来事は、一人ひとり中味は違いますが、その出来事が楽しいことであれば受け入れ、嫌なこと、煩わしいこと、苦しいことであれば、徹底的に遠ざけようと思します。それが私たちの心の中味でありましょう。

どんな事柄でも、楽しいこと、苦しいこと、それは、実は「私の心」がそうさせているのだ、ということをお教えるのが仏さまの教えであり、お念仏をいただくということであると思します。

お念仏をいただく、本願の教えを聞くということは、その私の心の課題、問題に気づかせていただくことであり、そのことがいただけたならば、どのような事実があろうとも、責任を持ってこの身に引き受けていくことが出来る。そんなことを思う訳です。

この私に起こってくる出来事、そのことが良いことでも悪いことでも、その善悪、事の良し悪しを分断、区別しているのは、私の「心」がそうさせていたのだ、ということに気づかせていただく。

そのことに気づけたなら、私たちの進むべき道は、自然と、自ずと決まってくるであろうと思します。